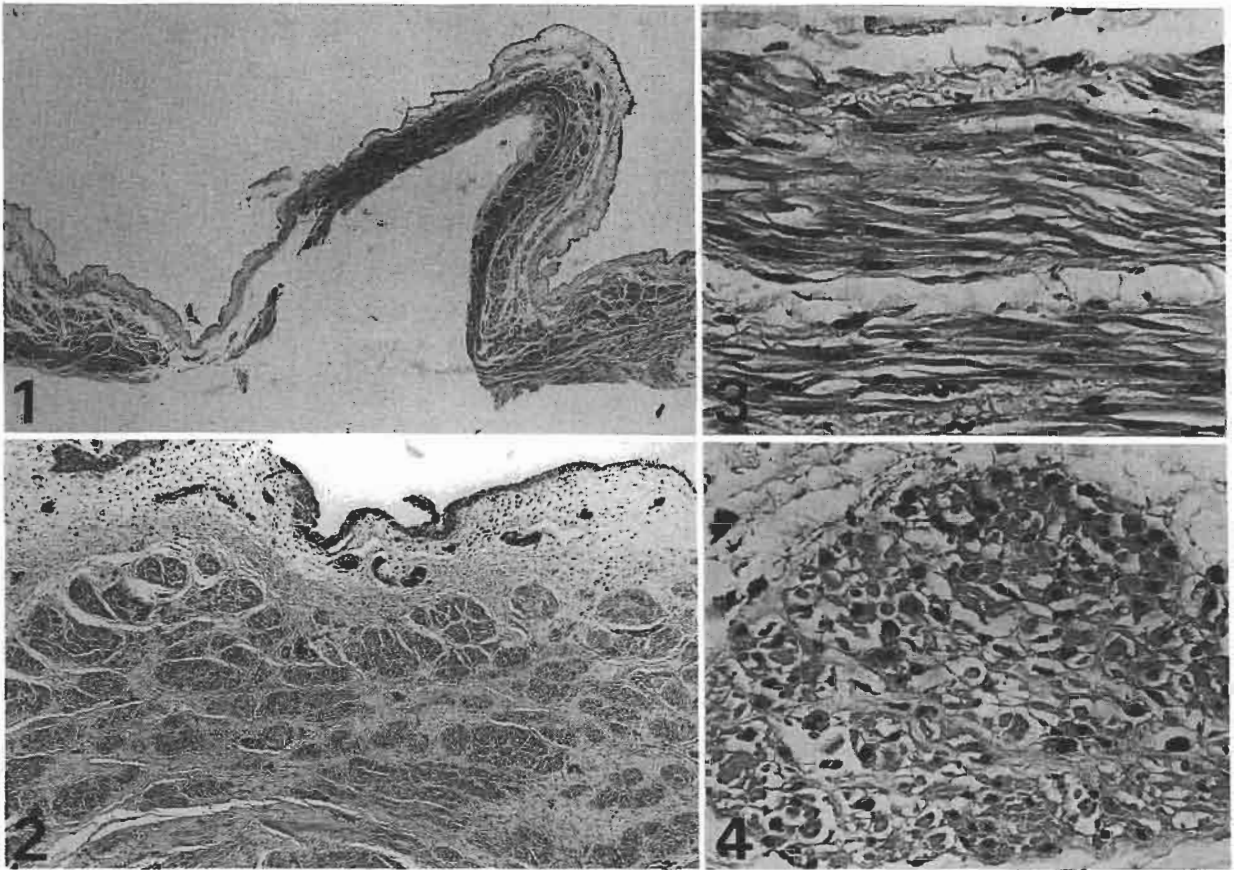


新生子馬の膀胱

競走馬総合研究所病理研究室出題 第32回獣医病理学研修会標本No.579



動物：ウマ，アングロ・アラブ種，3日齢。

臨床的事項：生後2日目に臨床的に膀胱破裂と診断され，翌日全身麻酔下で開腹手術を開始した直後に斃死した。

剖検所見：膀胱は膀胱尖から後方約5cmの背側において，正中線にほぼ平行して径約1cmの膀胱壁全層に及ぶ破裂孔の形成。当該領域とその周囲，特に背側の膀胱壁は菲薄で，顕著な充うっ血。一方，側壁から腹側にかけての膀胱壁は水腫性に肥厚し，褪色。

組織所見：病変は破裂孔を中心とした壁の菲薄化領域において最も著しかった（写真1，HE染色，ルーペ拡大）。即ち粘膜固有層及び下織は繊細な膠原線維の増生を伴った水腫性肥厚。一方，壁筋層の筋束は著しく萎縮（写真2，HE染色， $\times 38$ ）。これら筋束の筋線維は微細空隙形成あるいは硝子様化を伴い細胞質の幅が著明に狭く，核は濃縮するものが多かった（写真3，HE染色， $\times 385$ ）。筋束断面において筋線維の脱落像が頻繁に観察された（写真4，HE染色， $\times 385$ ）。萎縮した筋束及びその筋線維の

間には細胞成分に乏しい膠原線維の増生，そのため個々の筋束及び筋線維はしばしば離開して観察された。時折，筋線維が殆ど消失し，主に膠原線維から成る筋束，あるいは細胞質が水腫性膨化乃至淡明化を示す筋線維もみられた。上記変化は病変分布の上からは質的・量的に輪走筋において最も著しかった。

考察：今回の検索で最も注目された所見は，膀胱破裂が膀胱壁の最も菲薄な部位に起っていたことであつた。壁の菲薄化は膠原線維増生を伴った壁筋層平滑筋線維の著しい萎縮と変性に起因していた。当該例の日齢を考慮するならば，上記病変は出生以前から存在し，恐らくは産道通過時の膀胱内圧の上昇に抗し切れない程の壁の局所的脆弱化病変部からの破裂を推察した。平滑筋病変の成因は，病変程度が膀胱の膨満を制御する輪走筋に強くみられたことから，出生以前からの破裂部を中心とした物理的な負荷の存在を推測したい。

組織学的診断：膀胱破裂部筋層における平滑筋線維の変性・萎縮。